



第99回 「さんか・さろん」 まとめ
・2020年10月20日(火)
・「～秋の飯山～蛍の宿を守る会から見えるまちづくり」

・木村宏さん（北海道大学大学観光学高等研究センター教授）、清水唱博さん・清水葉子さん・中谷美南子さん（飯山蛍の宿を守る会事務局）、大西宏志さん・ほか（なべくら高原・森の家支配人）

2016年11月にスローライフ・フォーラムを開いた長野県飯山市。夏から分科会を何度も開催し、市民の皆さんとスローライフ学会会員とが交流を深めました。そのフォーラム以前から、何人かの学会会員が関わってきたのが「飯山蛍の宿を守る会」です。この日は、守る会の拠点である「なべくら高原・森の家」会場と東京の会場、そして北海道大学はじめ各地と繋ぎ48人参加の「さろん」となりました。

【蛍の宿を守る会とは】（以下「守る会」）

＜中谷＞知らない人に守る会のことを説明するとき“まちと村を繋ぐ米づくり体験サークル”という。まずは発足から今までのことを大西支配人から説明。

＜大西＞2003年から「守る会」が始まった。当時、遊休耕作地が多くなり、田畑が森に戻っていくような状態。その頃、飯山市市長だった小山邦武さんは自ら鎌をふるい、失われていく里山の景観を守る同志を募っ

た。数年の時を経て一大イベントへと発展
※写真左から「森の家」会場、中谷さん、大西さん。

した。生物多様性を促進する「冬季湛水不耕起植栽倍」にも挑戦。一年通して水をためてイトミミズが住める環境を作り、おたまじゃくしが大量発生、ヘイケボタルもここを住処として夏には蛍が乱舞するようになった。最近では機械を導入も。昔ながらの手作業、人海戦術で田植えや除草作業も。一番の楽しみは作業前のお弁当と、作業終了後の来訪者と住民との交流、すべて地元のお母さんによる手料理「おごっそ」がふるまわれる交流会。会員は2009年90数名を最高に、現在40名弱。

2017年、当初の柄山地区の水の管理が難しいので、移転し、今は藤沢地区の田んぼ



として活動が続いている。2018年からは持続的な活動を推進するための「守る会」コアメンバーが主体となり事務局業務を担っている。「森の家」は拠点施設として活動のサポートや新人職員の学びの場として一緒に作業をしている。今年は地元の下高井農林高校の生徒の参加もあった。

～「森の家」の若いスタッフから～

「まずは地域に慣れるのが先ということを感じる。活動を通じて地域の皆さんに寄り添えた。」「地域の皆さんから暖かい言葉をかけられ緊張がほぐれた。稲づくりを続けていきたい。」

<中谷>続いて東京から移住して、今「守る会」事務局キャプテンの清水唱博さんと、奥様の葉子さんから。「守る会」の管理をお願いし、集落の方々とのやりとりをされて



いる。※写真下が清水夫妻

<清水（葉）>きっかけは飯山でセカンドライフをと2012年に初めてきて、秋収穫から関わる。冬が衝撃的。

<清水>わざわざ遠方から田舎にきて農業を経験してくれている、むらのごちそうをみんなで囲み交流する。にぎやかになることはむらの方も喜んでいる。

<中谷>「守る会」一番の魅力は？

<清水（葉）>農業体験とか田んぼの作業に参加するというイベントはほかにあると



思うが、そのあと地元の方と交流会を持つというのが貴重。観光で希望の地へ行くことは沢山あるが、地元の人と飲み食いをして歓談をするというのはめったにない。

景観のいい田んぼで、作業を体験するというのは凄く良いことだ。田んぼに入る、土にふれる体験。特に私は草刈りの時、無心でやっている宗教行事のようにずっと心が落ち着く。人間としてこういう作業をするというのは良い体験ではないか。1人でも多くの方に参加してほしい。

<中谷>今後、この会をどのように。

<清水>

今年で18年、まずは会の成人まではちゃんと務めないといけない。ぼくらは東京からたまたま長野県の飯山市「なべくら高原・森の家」に出会った。豪雪地帯ですが四季折々の星が綺麗で虹もバッチリ見えて、秋になったら紅葉で、一年間楽しめる場所。ここでまず田んぼをおしえてもらった。水路の関係で泣く泣く圃場を変えないといけなくなったとき、藤沢の地権者の方が一番景観がよくて貯水池から一番に水が入る田んぼをこの会で使いなさいと紹介していただいた。この会の歴史を思ってそういう環境の地を貸してくださった。そういう地元の方々、当初からお付き合いしている方々が、まだこの田んぼのことを思っていらっ

しゃる以上は、頑張らなくては。

【飯山のまちづくりについて】

<中谷>続いてかつて「森の家」の支配人であり、「守る会」の初代事務局長でもあり、今でも総責任者であるような木村さんから、
<木村>私は「守る会」がどんな状況下で出来たのか。また飯山市どんなまちづくり



をしているのかを話したい。市の人口は2万人を切った、人口減少が

止まらない。「守る会」の始めた頃の飯山市の人口は26,000人、18年で6000人減った。集落は107、今は区と呼んでいる。集落といえども10人未満が10集落。そんななかで田んぼの再生をして蛍の出る環境を守ろうと始まったのがこの会。飯山は高齢化率が38%、全国平均よりずっと高齢者が多い。

地方創生の嵐の中で各市町は地域再生計画を出している。飯山市は4年前に新幹線が通り新しい飯山駅ができた。駅の開業にあわせるように、飯山市では新幹線が来てからのまちづくりをテーマにして、人口減をくい止めることを大きなミッションとしていた。起業する人たちを呼ぶ、移住定住へ力をいれる。平成26年に移住者12人だったが、令和元年には165人に。起業者は平成26年までは1人、それを令和元年には15の企業を産もうという作戦だ。農業は30%くらいが専業農家、そのうちの半分以上は自分たちが食べていくための農業。生産性のある農業をしていないということだ。そこも飯山にとってはつらい現状だ。

「守る会」は今の前々市長の小山さんが

はじめた。外からこの地で酪農をしに入ってきた方だ。飯山の地に惚れてというより空いていた農場で酪農を。酪農を通じて多くの方々と会い、多くの人たちに助けられ、この地は永住の土地にふさわしいと思った。この気持ちが「守る会」発足の奥底にあったのではないか。「守る会」の初期のころ、霞が関の方々、学者、文化人など、小山さんの交友関係の方々や夜なべ談義をしながら、蛍の田んぼを守ることの意義や、もともとどうやって人間が活かされているのか、などなど話したことを思い出す。「守る会」にはこういう副産物がついてくるのか、と思った。

酒を通じての交流はどここの田舎でもあることだが、集落をあげて「守る会」に来て下さった方々をもてなすというのを、集落の代表が地域のまとめ役になり受け皿を作ってくれた。これが「守る会」が18年続いた大きな理由だ。外から「守る会」を生き甲斐として通ってきた方も多く、しかし最初は元気で大酒を飲んでいた方も、「俺は酒が飲めなくなったんだよ」とか、「医者に止められている」とか、そのうちに姿を見せなくなってしまった方もいる。これは仕方がないことだ。参加者が減っているが、代わりも始まっている。「俺は行けなくなったけど息子夫婦を行かせる」など、



いろいろな広がりがあり若い人たちに代わっている。そうすると大学生や農業の研修生、外国人の方が入ってくる、新しいコミュニティが出来てくる。共通の思いとしてこの環境を守ることでこの風土を守っていける、みんなの手が少しずつかかることで次に繋がっていく、ここで作業することに意義がある、と。

新幹線がきっかけになって今の足立正則市長が「若者会議」を作った。もっと若者に発言権を、若者がまちづくりに参画せよということだ。民宿の跡取り世代が「夏フェス」をはじめてみたり、飯山の駅にアウトドアの人たちが集まるSHOPができた、いろんなジャンルで活動する若者たちが飯山で活動をし始めている。「森の家」のスタッフも含め若い人たちが、外から来た人達や、地域の重鎮の話を聞いて飯山アイデンティティーを持った。

若者のコミュニティが新しく出来るなかで、「我々は飯山に生かされているのだ」とそんな気持ちが伝播しつつある。今若者たちが飯山の野や里で様々な活動をしている。これは「守る会」だけのおかげではないと思うが、田んぼで生きている飯山のまち、飯山の人たち、これを感じた若者たちが共鳴し合ったということがとても素晴らしい。まちづくりは、こういう新しい若者たちをいかに活かしていくか、彼らの気持ちがまちに伝わるのか、まちで活動できるのかだと思う。



【質疑】

●感想・質問 () 内は居住地、○答え、() 内は回答者

●飯山市役所サイドから

ちょうど1年前に台風19号の被害、床上下浸水600世帯が被害を受け、市役所庁舎も



机の上まで浸水した。即、スローライフ・ジャパンのホームページで義援金の

ページを立ち上げいただきありがたかった。飯山市への移住者は、ふるさと回帰支援センターを窓口として昨年2019年は120名。新幹線が開業した年2015年は22名、2016年は71名、2017年は88名、2018年は109名、移住者が順調に増加している。

「守る会」は今までと同じで残そうとするのは大変だが、時代にあった変化をしながらこれからも発展してほしい。スタート当時は、自分は農林課で「森の家」の担当者だった。古民家の壁をペンキで塗ったり、木村さんたちと一緒にやらせていただいた、懐かしい。(飯山市 丸山真央さん)

●移住者が120人の、定着率は？

○ふるさと回帰支援センターを通して飯山に来た人しか数字を出していない。不動産屋などを通して移住される方もある。全体の定着率は把握していない。(飯山市 丸山)
○転出は、自分の地区では一組しか知らない。入ってきている方が30組あるが。転出される方は少ないと思う。ただ、入ってきたけど理想と違ったという方も。田舎を守るために、もともと住んでいる方が消防団や、神社を守る、ゴミ拾い、草刈りなど、守るための区自体の会費があるが、話が相手方に伝わらない。(清水)

●自分の土地でも移住者から、「住んでみたらいろんなお金がとられてなんなんだ」というトラブルが。家を建ててしまったので、文句を言いながら住んでいる状況もある。なかなかうまくいかない。(福島県古殿町)

●淡路島も人口が13万人台になった。自分が知っているころ頃からは5~6万も減少している。飯山のお話は参考になった、飯山にもお邪魔したので嬉しい限り。(淡路市)

●飯山はいいお店もあり、新潟からは妙高を越えて近いので楽しく行かせていただいている。大銀杏も親戚を連れて見に行った。昔ながらの日本の山の豊かな自然を残したい場所だと思う。

新潟の村上、高嶺という集落は山形県との県境、それから先は山しかない。そこも同じように地域の人たちが高嶺集落を守るために取り組んでいる。蕎麦を作って学校



を改築して地域の食を提供している。村上と飯山が連携したり、それぞれにある地域がいろ

いろな形で連携していく、それが食で繋がっていったらすごく面白い。(新潟市)

●移住者何人の目標をたてるのは辞めよう。地方創生の国におどらされている。飯山は素晴らしい所なのに。とはいえ「蛍の宿を守る会」の会員なので今年も早く玄米が来ないかなと待っているが。(東京都)

○痛・た・たという感じ、客観的事実をお伝えいたしました、ということで。(木村)

●ローカルライフスタイル研究会をやっている。掛川市はスローライフ・シティ宣言をして18年経った。ローカルライフスタイルは個性ある地域の暮らしを顕在化しようというのが目標。

移住定住の話ではやはり数値でというのは難しい。一発でうまくいくものではない。いきなり移住定住はかなり難易度が高い、二拠点居住くらいから始めていく、緩やかな移住定住の方法がいい。二拠点居住からひよっとしたら移住、定住に。二拠点居住のままでいい。(掛川市)

●着地型観光をやっているが、県外からのお客様が地元の人や地域資源を、重んじて尊敬してくださっている。当社はマニアックなツアーをしているからだとも思うが、「他所にないものだから」と言ってきただけ。そのもの自体に大変興味を持っていて、リスペクトしている。そういうことが受ける側、受け入れる側の皆さんにも伝わるので大変いい関係ができる。リピート率も高くなる。

定住の事を考えると、若い方が入ったとしても同じ課題を抱えることになるのでは。違う立場、違う所から、その方たちの得意な形で支援をすとか、コラボレーションをすると、交流は有効になる。(静岡市)



●地域でいろいろなことをやっているが繋がっていない感じがする。墨田区でスローライフ学会を通じて、月に何回かやっているカフェで、暮れは餅つきも高嶺からやってきて皆さんでやる。そういう繋がりが出来ているが、もう少し前に進めるかたちで積極的に出来ないかなと思う。(東京都)

●飯山市のスローライフ・フォーラムに参加した。飯山の田園風景をみて、はじめてなのに懐かしい気持ちになった。今日の話聞いて、またプライベートでも飯山市を訪れたい。(雲仙市)

●「蛍の宿を守る会」というのを聞いてなんと素晴らしい素敵なテーマなのだろうと思った。環境が素晴らしい地域なのだろう、水が綺麗なのだろうとすぐわかる。全国に「守る会」同様のところもあると思うので、ここが核になって協会ができれば素敵だ。90人もの核がいるという事が凄い。

起業をする女性が沢山いる。女性たちの起業は？東京とビジネスマッチングできるのでは？

○大きな収入には至っていませんがフリーマーケット的なイベントをやったりモールビジネス的な起業をする女性は増えてきていると認識している。(飯山市丸山)

●飯山は不思議なまちだ。大変失礼なが

ら景色、資源も、人も素晴らしいが、飯山でしかないかというところでもない。だけど、今日もこれだけの人も私も魅かれるという、何か非常に心地よい、答えのない問いにいつも誘われる。今日も答えが見つからずに心地よい時間を過ごさせていただいた。

○“飯山に育まれる私”という方が沢山育ってくれたらいい。(木村)

東京会場では飯山のリンゴ3種類をいただきながらの「さろん」、和やかながらも、まだまだ事務局も参加者もzoomが不慣れでトラブル続出でした。それでもみなさんが笑顔で支えてくださって、運営側はひたすら感謝です。

なお、皆様ぜひ飯山へ。そして「蛍の宿を守る会」へご参加ください。

飯山蛍の宿を守る会 <https://iiyamahotaru.jp/>
記録/スローライフ学会:小松崎いずみ、野口智子

